

預言者的詩人としてのアレン・ギンズバーグ —— “Howl” (1956)におけるエレミヤ的要素の考察をとおして

谷 岡 知 美

アレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg, 1926-97) は、1926年にアメリカのニュー・ジャージー州ニューアークで生まれ、少年時代を同州のバタソンで過ごしている。ギンズバーグは50年代に起こったビート世代の詩人として有名であるが、それと同時に、ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) の自由詩のスタイルを取り入れ、それを発展させた詩人であると言われることも多い。現代女流詩人である、アリシア・オーストライカー (Alicia Ostriker, 1937-) は、『アメリカン・ポエトリー・レビュー』に掲載された “‘Howl’ Revisited. The Poet as Jew” の中で、ギンズバーグに関して、「アメリカの文化から、アレン・ギンズバーグはウォルト・ホイットマンの作品を取り込み、その友愛と民主主義という価値観を同化した (筆者訳)」 (From American culture Allen Ginsberg embraced the work of Walt Whitman and assimilated the value of friendship and democracy) と述べている。これは一例であるが、このように、ギンズバーグとホイットマンを比較して紹介した研究は国内外にも多く見ることができる。一方で、ギンズバーグの先輩にあたる詩人のウィリアム・カーロス・ウィリアムズ (William Carlos Williams, 1883-1963) は、ギンズバーグが1961年に出版した詩集、『うつろな鏡』 (*Empty Mirror*) のために書いた序文の中で、「このユダヤ人の少年は、ダンテやチョーサーと比較したくなるが、よく考えてみたら預言者エレミヤと近いようだ (筆者訳)」 (...This Jewish boy, before going on to compare with him and Dante and Chaucer, but then comes around to parallel

ing him with the prophet Jeremiah) と、ウィリアムズは、ギンズバーグの中に預言者エレミヤを見いだしていたようである。ギンズバーグは、ウィリアムズと同じ街に住んでいたということもあり、ウィリアムズに、詩作に関する助言をよく請うていた話は有名である。本論文では、ギンズバーグの中のエレミヤの側面に焦点を当て、特に、1956年に発表した詩、『吠える』(“Howl”)と旧約聖書の『エレミヤ書』とそれに続く『哀歌』を比較、分析し、最終的に『吠える』に描かれている、ギンズバーグの預言者的思想や姿勢を明らかにしていきたい。

ギンズバーグの『吠える』は3部から構成され、最後に「脚注」によって締めくくられている。以下に挙げるのは、『吠える』の冒頭である。

I saw the best minds of my generation destroyed by madness, starving
 hysterical naked
 dragging themselves through the negro streets at dawn looking for an
 angry fix,
 angelheaded hipsters burning for the ancient heavenly connection to the
 starry dynamo in the machinery of night, (Ginsberg 49)

冒頭の第一行目において、語り手の“I”は、「僕の世代の最良の精神」が「破壊」されているのを目にしている。しかし、その続きには、なぜ破壊されたのか、という原因の説明は全くされておらず、それを嘆き吠え叫ぶ、「ヒップスター」(hipster)と呼ばれるアウトサイダー達の様子が、「フー」(who...)から始まる200以上の長い繰り返しの詩行によって描かれている。「ヒップスター」の代表的な人物としては、ニール・キャサディー (Neal Cassady, 1926-68)を挙げることができる。キャサディーは、“Howl”からの以下の引用に現れている。

who went out whoring through Colorado in myriad stolen night-cars, N.
C., secret hero of these poems, cocksman and Adonis of Denver-
joy to the memory of his innumerable lays of girls... (Ginsberg
51)

ここから、イニシャルの「エヌ・シー」(N. C.)は、ニール・キャサ
ディーを示すと考えられる。彼は同様に、ジャック・ケルアック (Jack
Kerouac, 1922-69) の『路上』(*On the Road*, 1957)の主人公である、
ディーン・モリアーティ (Dean Moriarty) のモデルだとも言われて
いる。『吠える』からもケルアックの『路上』からも分かるように、
キャサディー、又はディーンの行動は常軌を逸しており、そこにはいっ
さい規制がなく、本能の赴くままに振る舞っているような印象を受け
る。そのような性格をもつ「エヌ・シー」を、『吠える』の語り手は、
『吠える』の「かくれたヒーロー」(secret hero)と定義しているのだ
ある。

『吠える』の第二部では、第一部で「僕の世代の最良の精神」を破壊
した原因を、「モーラック」(Moloch)として告発する。

Moloch the incomprehensible prison! Moloch the crossbone soulless jail
house and Congress of sorrows! Moloch whose buildings are
judgment! Moloch the vast stone of war! Moloch the stunned go-
vernments! (Ginsberg 54)

Moloch! Moloch! Robot apartments! invisible suburbs! Skelton treas-
uries! blind capitals! demonic industries! spectral nations! invin-
cible madhouses! granite cocks! monstrous bombs! (Ginsberg
55)

この引用にある、「戦争」(war)と「政府」(governments)、そして「産

業」(industries)ということばは、当時のアメリカ社会を概観する際、役立つ。つまり、第一次、第二次大戦で経済的に裕福になったアメリカは、さらに科学技術の進歩に力をいれ、産業は大きく発展した。徹底管理を目差した圧迫的な政治、そして大企業がアメリカの資本を支配するようになり、物質的にかなり繁栄した、トッド・ギトリン (Todd Gitlin) のいう「潤沢の社会」(affluent society)⁽¹⁾の時代へアメリカは突入していくことになる。しかし、一見そのような「潤沢の社会」であったにもかかわらず、語り手は、「モーラック」(Moloch,...)で始まる詩行を繰り返しながら、「モーラック」を、当時の経済的、物質的には繁栄はしたが、その下に隠された、人間性は失われてしまったアメリカ社会であると見なし、それを訴えていくのである。

続く第3部では、ギンズバーグの友人であるカール・ソロモン (Carl Solomon, 1928-) をうたったエレジーとなっている。いわゆる天才と言われたカール・ソロモンに、ギンズバーグは精神病院で出会い、ソロモンを通して、正気と狂気の問題を問いただしている。当時一般的には、「狂気」と映っていたキャサディーやソロモン、つまり「ヒップスター」達を、詩の中心にすえることで、正気と狂気の不明確な境界線、さらに逆転の構造を作り上げた。その逆転の構造を造るために、語り手はあえて当時タブーとされていた言葉を多く取り入れ、違和感、不調和を引き起こすフレーズを並べ、さらには文章のシンタクスを無視することで、当時の社会概念の破壊を試みている。そうすることで語り手は、語り手の見た、間違った方向に進んでいる当時のアメリカに警告を発しているのである。この第三部では、「僕は君とロックランドにいるのだ」(I'm with you in Rockland, ...) という詩行を繰り返しながら、ギンズバーグのソロモンに対する感情的な側面が同時に現れている。

作品の締めくくりである「脚注」("Footnote")は、後に付け加えられたにもかかわらず、当時のアメリカ社会が進むべき方向を暗示しているように思われる。以下の引用は「脚注」の冒頭である。

Holy! Holy! Holy! Holy! Holy! Holy! Holy! Holy! Holy! Holy!
 Holy! Holy! Holy! Holy!
 The world is holy! The soul is holy! The skin is holy! The nose is holy!
 The tongue and cock and hand and asshole holy!
 Everything is holy! everybody's holy! everywhere is holy! everyday is
 in eternity! Everyman's an angel! (Ginsberg 57)

「聖なるかな！」(Holy!)ということばの繰り返しのみが並べられ、続く行では、全てを「聖なる」ものとするような描写がさらに続いている。ここで語り手は、アメリカの新たな進むべき方向を見いだしているようである。その方向は、『エレミヤ書』、それに続く『哀歌』をとおして『吠える』を見ると、次に述べるように、よりよく理解することができる。

『エレミヤ書』とは、ユダヤ教やキリスト教の世界において、イザヤ、エゼキエル等と並び大預言者と位置づけられているエレミヤの、生涯と預言を集成したものである。おおよそ紀元前600年代に、なぜエレミヤのような預言者の存在が必要とされていたか、という理由には、当時のエルサレムの危機的状況が関係している。当時に近東では、アッシリアの勢力の増大、そしてバビロニアの包囲も迫っており、エルサレムは没落寸前の状態であった。エレミヤはそのようなエルサレムの危機的状況に対して、以下のように神から言葉を受けることになる。

Then the LORD put forth his hand and touched my mouth; and the LORD said to me, "Behold, I have put my words in your mouth. See, I have set you this day over nations and over kingdoms, to pluck up and to break down, to destroy and overthrow, to build and to plant." (Jer. 1: 9-10)

これは『エレミヤ書』の冒頭の部分であるが、ここでなぜ神は、「あなたに諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる」と、他の国民を越えてエレミヤのみに特別な力を与えているのか、という疑問点が生じてくるであろう。つまり、エレミヤの預言者たる所以だが、その理由は、物語が展開されて行くにつれ徐々に明らかにされていくことになる。

当時のエレミヤ以外の預言者を含むエルサレムの人々は、バビロニアの支配がもう、すぐそこまで来ていたにもかかわらず、その降りかかろうとしている災難、『エレミヤ書』では「破壊に次ぐ破壊」と述べられているが、その不幸に全く気がつくことは無く、自分の目の前にある平穏な日常を信頼して生活していた。そのような国民の態度を、エレミヤは、「身分の低い者から高い者にいたるまで皆、利をむさぼり預言者から祭司に至るまで皆、欺く。彼らは、わが民の破滅を手軽に治療して平和がないのに『平和、平和』という」(For from the least to the greatest of them, every one is greedy for unjust gain; and from prophet to priest, every one deals falsely. They have healed the wound of my people lightly, Saying, 'Peace, peace,' when *there* is no peace, Jer. 6:13-14) と、繰り返し嘆いている。一方、このような真実の見えない状態、エレミヤの言葉をかりると、「愚かな子らで分別が無い。悪を行うことにさとく善を行うことをしらない」(For my people are foolish, they know me not; they are stupid children, they have no understanding. They are skilled in doing evil, but how to do good they know not, Jer. 4:22) 国民とは逆に、エレミヤは当時のエルサレムを「荒地」や「荒れ野」と呼び、明らかに「あなたの国を荒廃させるため、獅子は自分の国を出た。あなたの町々は滅ぼされ、住むものはいなくなる。それゆえに粗布をまとい嘆き、泣き叫べ。主の激しい怒りは我々を去らない」(A lion has gone up from his thicket, a destroyer of nations has set out; he has gone forth from his place to make your land a waste; your cities will be ruins without inhabitant. For this gird you with sackcloth lament and wail; for the fierce anger of the LORD has not

turned back from us, Jer. 4:7-8) と、エルサレムの陥落の危機を国民に警告していることが分かる。表面上は穏やかで平和と見なされていた当時の社会の影に差し迫っていた危機を、エレミヤは神の言葉を通して摘発し、続く『哀歌』において、預言者としてエルサレムとその国民を憂い嘆いたのである。

ここで注目すべきことは、先ほど取り上げた引用にもあるように、「主の激しい怒りは我々を去らない」と、エルサレムに降りかかる災いの原因をエレミヤが「主の怒り」、つまり「神の怒り」と見なしている点である。『哀歌』においても、「わたしは（エレミヤ）主の怒りの杖に打たれて苦しみを知った者」と神の怒りを述べている。エレミヤは当時の国民の無知な状態を嘆くと同様、彼らの腐敗した、神への信仰心に対しても強く非難している。『エレミヤ書』によると、物質的に豊かであった当時のエルサレムでは、尊いとされる祭司の世俗化、さらに物質、偶像崇拜のような形式ばかりを重視する形骸化した信仰心が目立ってきた、とある。そしてそのような当時のエルサレムに対しエレミヤは、「我々は主なる神に罪を犯しました。我々も、先祖も若いときから今日に至るまで主なる神の御声に聞き従いませんでした」(Let us lie down in our shame, and let our dishonor cover us; for we have sinned against the LORD our God, we and our fathers, from our youth even to this day; and we have not obeyed the voice of the LORD our God, Jer. 3:25) と、述べている。つまりエレミヤによると、バビロニアによって陥落されるエルサレムは、神への信仰を愚劣化したというエルサレム自身に問題があり、その怠惰で不誠実な国民に対しての神の怒りがエルサレムを崩壊に導いた、というわけである。このような、崩壊の危機にある国に対し悲観的な将来を見ながら憂い嘆く姿勢、そしてその原因を「神の怒り」とする態度を、預言者エレミヤから派生した単語で「ジェレマイヤード」(Jeremiad) と呼ぶ。この「ジェレマイヤード」的態度は、明らかにアレン・ギンズバーグの『吠える』に現れていることが分かる。

つづいてギンズバークの『吠える』における「ジェレマイヤード」的態度を見ていく。『吠える』には、エレミヤ的な思想のみならず、詩の形式面において旧約聖書の『エレミヤ書』、『哀歌』を、そのまま土台にしたような類似点を見ることができる。先ほど『吠える』を説明した際にも述べた『吠える』の冒頭の詩行と、『エレミヤ書』の以下の引用には、共通点が認められる。

I looked on the earth, and lo, it was waste and void; and to the heavens, and they had no light. I looked on the mountains, and lo, they were quaking, and all the hills moved to and fro. I looked, and lo, there was no man, and all the birds of the air had fled. I looked, and lo, the fruitful land was a desert, and all its cities were laid in ruins before the LORD, before his fierce anger. (Jer. 4:23-26)

この引用から、語り手“I”を通して、“I”が見た光景を描写している点、そしてその描写したものが「町々はことごとく」「打ち倒されていた」という表現に、『吠える』の冒頭と非常に似通った点を見ることができる。続く『哀歌』においても、語り手“I”の描写は続いていくことになる。

『吠える』も『エレミヤ書』、『哀歌』も同様に、この一人称単数の“I”を通して、『吠える』においては物質的に豊かになりすぎた「潤沢の社会」、つまり『吠える』の第二部で「人間の魂を奪った」「モーラック」をメタファーとして非難していく。「モーラック」は以下のように、その言語の由来は聖書にある。

You shall not give any of your children to devote them by fire to Molech, and so profane the name of your God: I am the LORD. (Lev. 18:21)
And he defiled To'pheth, which is in the valley of the sons of Hinnom,

that no one might burn his son or his daughter as an offering to Molech.

(2 Kings 23:10)

「モーラック」の本来の意味は、フェニキア人が子供を人身御供にして祭った神、であったが、今日では一般的に、「大きな犠牲を要求するもの」という意味も含まれる。トマス F. メリル (Thomas F. Merrill) は、「モーラック」を「社会的病巣」(social illness)⁽²⁾と定義しているが、『吠える』において語り手“T”は、そのような性格を持つ「モーラック」を通しそれによって「破壊された」人間の様々な様子を描写している。同様に『エレミヤ書』、『哀歌』においても、陥落の危機にあるにもかかわらず、現実を直視することなく平和を信じて生活する人間を警告の意味をこめて描写している。1950年代のアメリカ、そしてバビロニア支配直前のエルサレムという、両者崩壊していく社会を語る語り手“T”は、パーソナルな面もあるが、それよりはむしろ全知全能のパブリックな語り手であるような印象を受ける。オーストライカーは、これらの語り手“T”に対して、以下のように述べている。

In both poems the voice is exclamatory, impassioned, hyperbolic, intensely figurative, and virtually impossible to pin down, to locate, to identify. In both, the speaking or shrieking or wailing “T” oscillates between the individual and collective identity. (Ostriker)

このように、両者の“T”は、「事実上突きとめたり、捜し当てたり、何であるかを明らかにするのは不可能」であり、「個人のアイデンティティーと集団的なアイデンティティーとの間を行ったり来たりして（筆者訳）」いるのである。このような、『吠える』、『エレミヤ書』、『哀歌』両者に見られる、主観的客観的要素を同時に併せ持つ語り手“T”は、『エレミヤ書』では、神から「言葉を授けら」れたと直接述べられてい

るように、共通して預言者のような性格を持っている語り手である、ということができらるだろう。批評家ポール・ポルトウージュ (Paul Portuges) が彼の著作『アレン・ギンズバーグのヴィジョナリー・ポエティックス』(*The Visionary Poetics of Allen Ginsberg*, 1978) の中で、「ウィリアム・ブレイクがそうであったように、ギンズバーグも自分の中に預言者の姿を見ていた」⁽³⁾と言っているように、『吠える』における語り手“I”には、預言者エレミヤを思わせるような、ギンズバーグの預言者としてのエレミヤ的姿勢が現れているのである。

では、このような預言者的語り手“I”は、当時のアメリカ、又はエルサレムに何を見ていたのであろうか。『ザ・フィフティーズ』の著者であるデビット・ハルバースタム (David Halberstam) は、50年代のアメリカについて、「善意と豊かさに溢れたこの時代、アメリカ社会の本質的な素晴らしさに疑いを挿む国民はほとんどいなかった……国民の大多数が富の分配を受けられる強大な社会の到来は、彼らが抱いた壮大な野望をも凌駕する繁栄が現実となったことを意味していた」⁽⁴⁾と述べている。しかしその繁栄は第二次世界大戦に依るところが大きく、人類初の原子爆弾を使って大量殺人を成功させた悲惨な戦争がもたらした結果である社会の歪、人間性の歪みは、すでに社会の奥底に広がっていた。大多数の国民が、当時の「潤沢の社会」に順応しそれを謳歌していた頃、ギンズバーグはその影に潜む暗闇を敏感に察知していたようである。

The Cold War is the imposition of a vast mental barrier on everybody, a vast anti-natural psyche. A hardening, a shutting off of the perception of desire and tenderness which everybody *knows*... [creating] a self-consciousness which is a substitute for communication with the outside. This consciousness pushed back into the self and thinking of how it will hold its face and eyes and hands in order to make a mask to hide the flow that is going on. Which it's aware of, which everybody is aware of

really! So let's say shyness. Fear. Fear of total feeling, really, total being is what it is. (Tytell 6)

これは『パリス・レビューでのインタビュー』であるが、ここでギンズバーグは、「皆が気づいていること、本当に気づいていることなんだよ！ええと、それは恥ずかしさと言ったら良いのかな。いや、それは恐怖だ。完全な恐怖の気持ちのままにそのことだ（筆者訳）」と述べている。50年代においては、社会の状況は「潤沢」であったにもかかわらず、ある説明し難い陰鬱な予感が、人々の心に影を落としていた。それは60年代に混沌の時代となって表面化することになり、ギンズバーグはそれを敏感に感じ取り、その預言者としてのエレミヤ的姿勢を語り手“T”に込め、『吠える』において「モーラック」を用いながら、精神的に崩壊していく社会を描いたのである。『吠える』からの以下の引用は、それを良く表している。

Moloch who entered my soul early! Moloch in whom I am a consciousness without a body! Moloch who frightened me out of my natural ecstasy! Moloch whom I abandon! Wake up Moloch! Light streaming out of the sky! (Ginsberg 55)

同様に、『エレミヤ書』、『哀歌』においても、当時の「平和がないのに『平和、平和』という」国民とは対照的に、「町の広場を歩こうとしても一歩一歩をうかがうものがある。終わりの時が近づき、私達の日は満ちる。まさに、終わりの時が来たのだ」(Men dogged our steps so that we could not walk in our streets; our end drew near; our days were numbered; for our end had come, Lam. 4:18) と、悲観的な将来を嘆いている語り手“T”を見ることが出来る。『哀歌』には、このような語り手“T”，一般的にはエレミヤとされているが、語り手の未来に対する嘆きが延々

と歌われている。このように、『吠える』、そして『エレミヤ書』、『哀歌』における語り手“I”は、預言者的眼差しを持って冷静に社会を見つめ、その奥底に潜む、すでにそこまで来ている危機的状態を告発し、憂い嘆いているのである。

このような、崩壊していく社会に対して『エレミヤ書』では、先ほど取り上げたように、「抜き、壊し、滅ぼし、破壊しあるいは建て、植えるために」(to pluck up and to break down, to destroy and overthrow, to build and to plant)、預言者的語り手“I”に『エレミヤ書』、『哀歌』を語らせている。この「抜き、壊し、滅ぼし、破壊しあるいは建て、植えるために」というフレーズは、『吠える』のもつ構造にちょうど当てはめることが可能である。『吠える』において語り手“I”は、冒頭でも述べが、逆転の構造を用いている。つまり、当時50年代のアメリカではアンチ・ヒーローと見なされていたような、ニール・キャサデー、言い換えると、ヒップスターと呼ばれる人達を詩の中心にすえてヒーローにすることで、当時根付いていた価値基準に揺さぶりをかけ、さらにソロモンを通して狂気と正気の曖昧な境界線を破壊することに成功している。その上、当時タブーとされていた言葉をふんだんに使い、そのような卑猥な言葉と清らかとされる言葉を組み合わせることで詩行に強い衝撃を持たせ、当時は当然なものとして受け止められていた社会秩序、既成概念の破壊を試みているのである。なぜなら、『吠える』における「ジェレマイヤード」的語り手“I”は、順応主義や物質主義に覆われた表面上は豊かである社会を「滅ぼし、破壊し」、その水面下に潜む人間性の崩壊している危機的状態を暴露することが目的だったからである。ハルバースタムは、ギンズバーグの『吠える』がシックスギャラリーで朗読されたことについて、「ビート族の成功は、古い秩序が変貌しつつあることの確実な証拠だった。厚い壁はすでに音を立てて崩れていたのである」⁽⁵⁾と言っている。『吠える』におけるギンズバーグの「ジェレマイヤード」的な姿勢は、それ自身の中に、無知な国民に対する怒りから生

じる破壊力のある小さなモーラックのようなものを持ち、『エレミヤ書』でエレミヤが神から授かった言葉、「抜き、壊し、滅ぼし、破壊し」ということを実行し、それを成功、つまり「建て、植える」という結果に導いた、ということができるであろう。このように、預言者の詩人としてギンズバーグを見たとき、彼自身の中に神は存在し、それは彼の内なる怒りの声となりモーラックにあるような破壊力を持って、『吠える』という叫び声をあげたのではないだろうか。

『吠える』、『エレミヤ書』『哀歌』を比較する際、さらに注目すべき点は、両者の最終部分の違いにある。『哀歌』の締めくくりは、「あなた（神）は激しく憤り、わたしたちを全く見捨てられました」（Or hast thou utterly rejected us? Art thou exceedingly angry with us? Lam. 5:22）とある。一方『吠える』では、先ほど述べたように、『哀歌』とは対照的な、肯定的な結末を見ることができる。ギンズバーグの「ジェレマイヤード」的な姿勢は、エレミヤの悲観的な態度とは違った、未来に明るい光を認め、『吠える』の第1部から第3部では当時の社会に嘆き、怒り、破壊を試みたにもかかわらず、最終的には全てが「聖なる」ような、まるで天国のような世界を示唆しているように思われる。このような天国を希求する態度は、聖書の『黙示録』に見ることができる。

...The living creatures never cease to sing... “Holy, holy, holy, is the Lord God Almighty, who was and is and is to come!” (Rev. 4:8)

By its light shall the nations walk; and the kings of the earth shall bring their glory into it, and its gates shall never be shut by day-and there shall be no night there; they shall bring into it the glory and the honor of the nations.

(Rev. 21:24-26)

ここには神の栄光に満たされた完全な街 (city of perfection), 換言する

と「ニュー・ジェルサレム」(New Jerusalem)が描かれている。このように、預言者の語り手を介してみた時、アメリカ植民以来続いている、アメリカ神話(Myth of America)の思想、つまり17世紀にニュー・イングランドに到着したピューリタン達が胸に抱いていた希望、アメリカに全てが清らかで天国のような国、ニュー・ジェルサレムを建国するという、昔ながらの考え方にやや近い思想を、『吠える』の中に見ることができるのではないだろうか。批評家のサッコバン・バーコビッチ(Sacvan Bercovitch)は、彼の著作『アメリカン・ジェレマイヤード』(*American Jeremiad*, 1978)において、アメリカの作家について以下のように述べている。

American writers have tended to see themselves as outcasts and isolates, prophets crying in the wilderness. So they have been as a rule: *American Jeremiahs*, simultaneously lamenting a declension and celebrating national dream. Their major works are the most striking testimony we have to the power and reach of the American jeremiad. (Bercovitch 180)

ギンズバーグの『吠える』は、このバーコビッチのいう、ホーソン、メルヴィルの流れをくむような、アメリカン・ジェレマイヤードの文学にあてはめることが可能である、とすることができるのではないだろうか。

地方詩人として土着の詩を書きつづけたウィリアム・カーロス・ウィリアムズを慕っていたギンズバーグは、ウィリアムズの態度にならって詩の題材をアメリカそのものに絞って『吠える』を創作したようである。その中でギンズバーグは、批評家ジョナ・ラスキン(Jonah Raskin)が示すように、「アメリカの預言者」(*American Prophet*)⁽⁶⁾とし

でのペルソナをつけ、預言者的語り手に詩を展開させていくことで、すべての物が「聖なる」ようであるニュー・ジェルサレムのような新しいアメリカの建国を希求していたのかもしれない。ギンズバーグの『吠える』は、冒頭で取り上げたウィリアムズのギンズバーグに対するコメントのように、『エレミヤ書』、そして『哀歌』を基礎におきながら、ギンズバーグ独自の、チョーサーの持つ皮肉的でユーモア溢れる技法と、ダンテのような人間を罪人として非難するような態度を交えて描いたようである。以上述べてきたように、ギンズバーグにエレミヤの要素を見たとき、『吠える』は、現在では広く浸透しているカウンター・カルチャーの突破口であった、ということのみならず、『吠える』をアメリカン・ジェレマイヤードの系譜として見なすことが可能であるし、ホイットマンとは正反対の、ギンズバーグのアメリカに対する態度を見ることができるのである。このような、ギンズバーグの預言者的詩人としての態度は、彼の後の作品、『カディッシュ』(Kaddish, 1961) や、『アメリカの没落』(The Fall of America, 1973) において、さらに展開されていくことになるのである。

註

本論文での聖書からの引用は、Buttrick, George Arthur, ed. *The Interpreter's Bible*. New York: Abingdon Press, 1952. の, Revised Standard Version より引用した。本論文での『吠える』の日本語訳は、諏訪優氏の『アレン・ギンズバーグ詩集』より引用した。

本論文での聖書の日本語訳は、『聖書 新共同訳——旧約聖書統編つき』東京：日本聖書協会, 1987. より引用した。

- (1) トッド・ギトリン氏は、“affluence”について、「『アフルエンス』は普遍的な広がりをもって50年代のアメリカ全体の状況を表していると考えられた。実際に『アフルエンス』は、長い間物質的生産と獲得を中心的な活動としてきた社会におけるれっきとした経済的心理的事実であった」と説明している。トッド・ギトリン著。疋田三良、向井俊二訳『60年代アメリカ：希望と怒りの日々』東京：彩流社, 1993. p. 23.
- (2) Merrill, Thomas F. *Allen Ginsberg*. p. 56.

- (3) Portuges, Paul. *The Visionary Poetics of Allen Ginsberg*. p. 138.
- (4) デビット・ハルバースタム氏は、『ザ・フィフティーズ』の p. 12で述べている。
- (5) 同様に, p. 551で述べている。
- (6) ジョナ・ラスキン氏は, *American Scream* の p. 230で, “Then, too, in Howl, he finally wrote a poem to match the immense persona that he had had in mind for himself for years—the persona of an American prophet” と述べている。

参考文献

- Ball, Gordon, ed. *Allen Ginsberg; Journals: Early Fifties, Early Sixties*. New York: Grove Press, 1977.
- . *Allen Ginsberg; Journals Mid-Fifties, 1954-1958*. London: Viking, 1995.
- Bercovitch, Sacvan. *American Jeremiad*. London: U of Wisconsin P, 1978.
- Burns, Glen. *Great Poets Howl: A Study of Allen Ginsberg's Poetry, 1943-1955*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1983.
- Davidson, Michael. *The San Francisco Renaissance: Poetics and Community at Mid-century*. New York: Cambridge UP, 1989.
- Dickstein, Morris. *Gates of Eden: American Culture in the Sixties*. New York: Basic Books, 1977.
- Foster, Edward H. *Understanding The Beats*. Columbia: U of South Carolina P, 1992.
- Ginsberg, Allen. *Selected Poems 1947-1995*. New York: Harper Collins, 1996.
- Holmes, John C. *Passionate Opinions: The Cultural Essays*. Fayetteville, Arkansas P, 1988.
- Hyde, Lewis, ed. *On the Poetry of Allen Ginsberg*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1984.
- Kerouac, Jack. *On the Road*. London: Penguin, 1976.
- Merrill, Thomas F. *Allen Ginsberg*. New York: Twayne, 1988.
- Ostriker, Alicia. “‘Howl’ Revisited. The Poet as Jew.” *American Poetry Review*, July-August 1997 v26n4p28 (4) <<http://www.galenet.galegroup.com/servlet/>>
- Portuges, Paul. *The Visionary Poetics of Allen Ginsberg*. Santa Barbara: Ross-Erikson, 1978.
- Raskin, Jonah. *American Scream*. Berkeley: U of California P, 2004.
- Tytell, John. *Naked Angel, the Lives and Literature of the Beat Generation*. New York: McGraw Hill, 1976.
- Waldman, Ann, ed. *The Beat Book, Poems and Fictions of the Beat Generation*. Boston: Shambhala, 1996.
- 亀井俊介著。『アメリカ文学史講義3』東京：南雲堂，2000。
- 諏訪優訳『アレン・ギンズバーグ詩集』東京：思潮社，1991。
- デイヴィッド・ハルバースタム著。金子宣子訳『ザ・フィフティーズ：1950年代アメリカの光と影』東京：新潮社，2002。

- トッド・ギトリン著. 疋田三良, 向井俊二訳『60年代アメリカ: 希望と怒りの日々』東京: 彩流社, 1993.
- ピーター・C・クレイギ著. 山森みか訳『デイリー・スタディー・バイブル22: 十二預言書 I』東京: 新教出版社, 1989.
- . 松平陽子訳『デイリー・スタディー・バイブル23: 十二預言書 II』東京: 新教出版社, 1989.
- ロバート・デヴィドソン著. 荒井章三, 加藤明子訳『デイリー・スタディー・バイブル19: エレミヤ書・哀歌』東京: 新教出版社, 1987.